



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ 白駒妃登美

誰の人生にも忘れえぬ出会いがあると思いますが、私にとって高校時代の古文の先生との出会いが、まさにそうでした。文法や言葉の解釈だけでなく「この作者はね」「この時代はね」と話が深まる授業は、まるでその時代にタイムスリップしたかのよう。古典の面白さを知った私は、通学電車の中で貪るように読み始めました。最も魅了されたのが、清少納言の随筆『枕草子』。日常生活の何気ない一コマが、彼女の手にかかると実に鮮やかに生き生きと動き出すのです。読んでいる私の感性まで解き放たれるような、不思議な感覚を覚えました。「春はあけぼの」で始まる第一段は、あまりにも有名ですね。特に印象的なのが「冬はつとめて」のくだり。「冬は空気の澄んだ

### ＊古典への目覚め

## —— 日本的感性を広めた清少納言

# もつと自由に表現していい

早朝がいい」。そんな彼女の感性に触れて、寒さが苦手な私も冬の朝の凜とした空気が好きになりました。古典に親しむと、個人の体験を超えた民族の記憶や懐かしさがこみ上げてきて、感性が豊かになりますね。

### ＊豊かな感性、深い知性

『枕草子』はおよそ八百年の長きにわたって読み継がれ、日本人の感性に影響を与えてきました。作者の清少納言は中流貴族の歌人の家系で育ち、第六十六代・一条天皇の後である定子に仕えました。とても美しく才知溢れる定子を、清少納言は心から敬愛しました。そんな二人の関係性を象徴するような素敵なエピソードがあります。それはまだ寒さの残る、ある冬の早朝の出来事。部屋を閉め切って火鉢に群がる女



清少納言 平安時代中期、第66代・一条天皇の后である定子に仕え、随筆『枕草子』などを執筆。(生没年不詳) 歌人・清原元輔の娘。結婚歴があり、子供もいたとされる。実名は不明。

【イメージイラスト】アオジマイコ